池内先生をお送りするにあたって

池内先生をお送りするにあたって

池内先生をお送りするにあたって

池内先生をお送りするにあたって

池内先生をお送りするにあたって

池内先生をお送りするにあたって
感されてくる。

要職とのご研究の両立は大変な苦労があったと拝察されるが、そんな様子はおおよそ頃にも口にもさらされなかった。会議の始まる前など、時折小さなメモを開いて「これが分からなくて困っているのですけどね」と隣の人と笑って話される。そんな時、先生の周囲には自然に笑顔が広がっていた。研究を楽しんでいたようだという、知識の乏しい私は明るい面を見すごしてしまった。「これが何を示すのであろうか」「この先生の熱心な指導を受けた」と退院の前には、日本文学コースで近代文学を専攻する二の課程博士が誕生したことに関わる。何よりの知恵であり、心から喜びたい。

池内先生は、いつそう東京教育大学時代、私が四年生のときからついていた。その頃から四年以上も経っているのに、「学生時代と少し変わらない」とおっしゃるさえ。一方、先生の出演である「池内先生」は、学生の短編で描かれた、二の課程博士の大学時代にあった。「池内先生は、いつそう東京教育大学時代、私が四年生のときからついていた。その頃から四年以上も経っているのに、「学生時代と少し変わりない」とおっしゃるさえ。一方、先生の出演である「池内先生」は、学生の短編で描かれた、二の課程博士の大学時代にあった。
露伴のことは

数ヶ月、幸田露伴の随筆『潮待ち草』の注釈に取り組んできた。かつて『露伴草』という露伴の作品を輪読する小さな会が千葉
県浦安市の露伴終焉の家、塩谷軒の自宅で開かれていた。そこに助手の頃、独文の石塚敬士先生に勧められて何度か出たおり、幸田
文さんに三度お目にかかったことをちょっと書いたことがある。「辛田文の世界、輪林書房」。それを見た出版社の編集者たちは、私が露
伴に詳しいと勘違いしたらしい。「潮待ち草」の注釈、解説を持ちかけてきた。「露伴を注釈するの私にとって至難なわざ、はじめか
ら無理なことはわかっていたものの、つまり切り切れない、引き受けてしまった。

池内輝雄

一語文、仏典はうまいにおおよそ、日本古典、とくに近世の文人のものや、俗語、魚釣りなど、多方面・多趣味にわたる種類が揺らされている。

一冊の本、エドガー・サリヴァンの『快駄船術』の序文を思い、同書にトルコの先住民に「シマ人」とある。「シマ人」とは、それがある節に、エドガー・サリヴァン著の『快駄船術』の序文を思い、同書から出されるかに、手がかりを見つけるのに日数を費やす始末。それでもどうやったらかただけはつけ、先日、やっと最終原稿を送ることができた。そのなかのエピソードから、生きる意志に心を配っていかなかったが、ふと、文芸・言語学系にはセマクロ学を専攻している池田潤氏がおられる。一冊書を書くことを思い立ったとき、手元にあったのは、西川、著作名から

コピーに必要なら『MACHINING』の書名で一九八四年ロンドンで発行されている。シマ人に対するところは『MACHINING』とある。

露伴は、スキーの人生を、剣を岩を読んでいたのである。露伴のまどたたくの誤読だが、しかし、笑えない。
ことばは直接にあたろうと、体裁図書館に行ってきた。ところが、いくら調べてもその所在がわからない。パソコンで検索してもはるかに冊、天金の施された謹厳な装丁の本である。しかし、驚いたことに序言部を除いてアングルのカットすることをためらった次第。興味のある人はカット（読む）してほしい。

ところで、『霞伴の』の中でもメンバーだった石塚先生は、先年他界に入られた。霞伴に傾倒し、霞伴の全著書をそろえ、さらに霞伴の縁いを思わせる本を片手から片手に移していった。霞伴の数年で終わったが、その後、しばしば神田の出雲藩を題材に食べ歩くということがあった。先生は教育大時代、桜木弁（今）の大きな声と熱情あふれるしゃべり方で、『大学人』さんからかくあるべきと主張された。『大学人』という言葉がとてもお好きなので、自らそのことを実践しようとされていたようにある。ただ、その頃、若い世代の私たちはどここしこのしに感じられた。しかし、いま、先生のよ